クロニカ(2) ―20世紀初頭のクロニスタ、ジョアン・ド・リオ
CRÔNICA(2) – João do Rio, um cronista do início do século XX

エレナ・トイダ
HELENA H. TOIDA

O presente trabalho vem a ser uma continuação do anterior, no qual fizemos uma abordagem etimológica do termo crônica e sua evolução na história literária do Brasil até alcançar a posição dos dias de hoje .

A crônica, que de início apareceu sob a forma de folhetins, começou a se posicionar no meio literário a partir dos meados do século XIX, tendo como seus cultores, José de Alencar e Machado de Assis. Entretanto, sua popularidade é atingida nos primeiros 20 anos do século XX, graças principalmente a João do Rio, jornalista e cronista de grande sensibilidade em retratar as várias facetas da vida mundana que se desenrolava na então capital, Rio de Janeiro.

Entre a primeira tentativa de estabelecer uma língua propriamente brasileira no século XVIII através do indianismo e a de consolidar a língua e cultura brasileira a partir de 1922, tendo como marco a Semana de Arte Moderna, há um período de aproximadamente 20 anos, denominado Pré-Modernismo na história literária. Nesse período encontramos os escritores como Monteiro Lobato que se empenha em aprimorar a língua essencialmente “brasileira” e Euclides da Cunha que volta os olhos ao interior do país, retratando a vida no sertão. No cenário social, essa época corresponde aos anos denominados de *belle époque*, em que a metrópole passava por vertiginosas transformações

sociais e econômicas. Denominada mais especificamente de *belle époque* carioca, encontramos as descrições mais vívidas da sociedade do final do século XIX e início do XX nas crônicas de João do Rio.

Neste trabalho, faremos uma breve análise de João do Rio, esquecido por mais de meio século apesar de sua brilhante produção de crônicas retratando a capital da época. E, na tentativa de resgatar seu real valor como literato que contribuiu grandemente para a consolidação da crônica, este produto genuinamente brasileiro, pretendemos verificar a intemporalidade de suas obras, apresentadas depois de um século.

はじめに

以前発表した拙稿(1)では、「クロニカ」というジャンルがブラジル独自のものであることを、その語源や文学史を通して考察した。それは、19世紀中頃に始まった、その日の、政治、社会、芸術、文学などを題材とする新聞の文芸欄、または新聞の下部に載る囲み記事のようなもので、当初フォリェチン(folhetim、フランスの新聞の*feuilleton*が語源)と呼ばれていたが、やがて「クロニカ」へと名称が変わった。20世紀に入り、大いなる支持のもと文学界で市民権を得たこのジャンルは、研究が進むにつれ、その奥深さを思い知らされることとなった。

本稿では、近代主義への過渡期のさなか、都市改革が進められ、世俗主義がわきあがる当時のリオの街の生き生きとした、ドラマチックな側面をクロニカに記し続けた、特筆すべきジョアン・ド・リオ(João do Rio)に焦点を当て、考察を試みる。19世紀末から20世紀初頭にかけて、当時のブラジルの首都リオデジャネイロにおいて、目覚ましい活躍をしたド・リオ(2)は、クロニカがその地位を確立するのに大きく貢献したクロニスタ(3)である。

彼は、ほぼ半世紀近くもの長い間忘れ去られていた文人である。29歳の若さでブラジル文学院 (Academia Brasileira de Letras) にノミネートされ、数々のクロニカ、戯曲、小説、短篇などを残したにもかかわらず、なぜ忘却の彼方へと追いやられていたのだろうか。理由はともかく、ここ

10年の間にいくつかの作品が再出版されるようになった。実際、ブラジルで手に入れられた彼の本は『儚いクロニカたち』(*Crônicas efêmeras*) 一冊のみであったが、インターネットにより、『リオにおける宗教』(*As religiões no Rio*)と『街頭の魅惑的な魂』(*A alma encantadora das ruas*)は全文印刷可能であった。

さて、長い間に書き貯められたクロニカは、その多くが作者によってアンソロジーが編まれる。クロニカに文学作品本来の普遍性を与えるため、このような方法がとられるのであるが、著名な文芸評論家モイゼース(Moisés) (4) は、次のように考察している。

> ルポルタージュと文学作品の、ある出来事の客観的な報告と空想に彩られた創作との間で揺れ動くクロニカは、新聞や雑誌のコラムや文芸欄に掲載する作品であるがゆえ、すぐに「老化」してしまう宿命を持つ。それに抵抗するがごとくアンソロジーが編まれるのだが、それでもクロニカは時の腐食には勝てないように思える。まるで、その役割は儚さの上にしか成り立たないように。

確かにクロニカの役割は、時の話題や人生の悲喜こもごもの出来事を、多くの場合ユーモアと風刺にからめて表現し、読者を楽しませることである。ド・リオの作品も例外ではない。彼のクロニカは、当時のリオのサロンから裏通りにまで至る様々な題材を扱っているが、いずれにもピリッとした風刺が散りばめられている。それは、彼の生きた時代と密接な関係にあるのだが、これについては後述する。では、20世紀初頭に出版された『儚いクロニカたち』は、21世紀初頭において、どのように解釈され得るのだろうか。はたしてクロニカが一文学ジャンルだと位置付けられる最も大切な条件としての、普遍性と*intemporalidade*（時を超越する）は、ド・リオの作品の中に存在するのだろうか。

ジョアン・ド・リオとは？

ジョアン・ド・リオとは、ジョアン・パウロ・アルベルト・コエリョ・バレット (João Paulo Alberto Coelho Barreto) の数あるペンネームの

一つである。彼はジョアン・ド・リオ以外にも、ジョー (Joe)、ジョゼ・アントニオ・ジョゼ (José Antonio José) というペンネームも使用していた。また時には、記事やクロニカを本名のパウロ・バレット(Paulo Barreto) の名で掲載することもあった。しかし、変貌する街をその目で見据え、描写し、生まれてから死ぬまでリオで生活したことを考えると、「リオのジョアン」を意味するジョアン・ド・リオが最もこの作家のペン・ネームにふさわしいのではないかと思われる。

ド・リオは、1881年リオに生まれる。わずか17歳でジャーナリストとして活動を始め、２年後の1900年には、後に『リオにおける宗教』として編纂された様々なルポルタージュで人々の関心を集めた。1905年には、文学に関する考えなどをインタビュー形式でまとめ、注目された。これも後に『文学的瞬間』(*Momento literário*) として出版されている。そして、1910年には、29歳の若さでブラジル文学院のメンバーに選ばれた。1921年、40歳でその生涯を終えるのだが、当時の新聞や雑誌には、その才能を惜しむ声が多く寄せられたとある。

彼は自らの中に矛盾をかかえ、そのため敵も多かったようである。しかし、当時の社会を生き生きと描き、ジャーナリズムに変化や新しい風を送り込んだド・リオの偉業は正当に評価されるべきではないだろうか。『儚いクロニカたち』の年譜には、以下のように記されている。

> 当時のリオで、全てを見、全てを観察し、全てを心に止めコメントを付した。
> 好意、優しさ、興味、アイロニー、そして時折憤怒をもって。ジャーナリストとして、その職業を愛し、威厳を与えようとした。また新聞界の人間たちの職業的地位の確立のためにも奮闘した。（略）新聞に関しては、社説から警察ルポまで、文学的記録からクロニカまで、全てに関与した。しかしながら、彼が熱意と優雅さと生き生きとした表現とオリジナリティーと才能をもって突出していたのは、日常のコメンテーターとして、称賛すべき日常のクロニスタとしてである。

80年以上も前に死んだ、ド・リオが今になって再び脚光を浴びている

理由はどこにあるのだろうか。これまでに発表された様々な論文を、年代順にまとめてみる。

まず、最も独創的だといわれているのが、精神科医ネーヴェス・マンタ (Neves-Manta) によって1926年に発表された『ジョアン・ド・リオの芸術とノイローゼ』(*A arte e a neurose de João do Rio*) である。この本でマンタは、ド・リオが心に抱える深い葛藤を抑制するため、短編「ピンクの更紗をはおるベビー」(“O bebê de tarlatana rosa”) (5) にみられるような不健全な世界を描いたと分析している。これによって、ド・リオは同性愛者であることが衆知されることとなり、彼が長いあいだ忘れ去られていた理由の一つだろうと思われる。当時は、まだ保守的な色の濃い時代であった。死後5年で、このように同性愛者だと公言されたことが、文壇におけるド・リオの過少評価につながったのではないだろうか。

文学史家のルシア・ミゲル・ペレイラ (Lucia Miguel-Pereira) は、1950年に出版した『ブラジル文学史』(*História da literatura brasileira*) 第12巻の中で、ド・リオの文体を、「新しい才能もなく、ジャーナリズムの習慣に吹き込まれた欠点しかみられない－ごてごてしたスタイル、効果を引き出そうとする姿勢、表面的な見解」と酷評している。しかし、「ごてごてしたスタイル」を除けば、他の2点は現代の文学にも共通する点ではないだろうか。そのような側面からも、現代の研究家たちがド・リオに興味を抱くのは理解できるのではないだろうか。

1956年に、ブリット・ブロッカ (Brito Broca) が発表した試論「ブラジルにおける文学活動－1900年」(*A vida literária no Brasil-1900*) では、ド・リオは単なる模倣者でしかなく、パラドックスやイギリスの作家オスカー・ワイルド (6) の気取ったポーズを普及したにすぎない、つまり才能はあったが、教養が浅かったと批判した。

ところが、80年代を境に、ド・リオの評価に変化が見られ始める。

1985年には、文学評論家ジョゼ・パウロ・パエス(José Paulo Paes) が、『ギリシャ人とバイーア人』(*Gregos e baianos*) に発表された論文「ブラジル文学にみるアール・ヌーヴォー」(O art nouveau na literatura brasileira) で、ド・リオほどブラジルのアール・ヌーヴォーを象徴しているものはいないと断言している。つまり、装飾の強調は彼の創造性の原動力となっているというのである。

最新の研究は、1996年に出版された、オルナ・レヴィン・メッセル (Orna Levin Messer) の『ダンディーの表象』(*As figurações do dândi*) である。この中で、メッセルは、ド・リオが、ブラジルに吹き始めた近代化の風を前に戸惑う人々の意識を表現していると述べている。また、めまぐるしく変化していく町並みを、古いスタイルで表現した「徽の生えている」作品郡であると結論づけている。

以上の経緯をみると、かなり酷評が多いのだが、それでも常に研究題材として取り上げられ続けたのは、やはりこの作家の魅力によるものだろう。拒絶と魅了が同居するという、一見矛盾しているかのようにもみえる彼の作品が、実は、グローバル化時代の、多文化社会に生きる現代のブラジル人のインテリたちの共感をよぶものがあるのではないだろうか。作品誕生から１世紀を経て、彼は我々に何を語ってくれるのだろうか。芸術を人生に近づけ、ルポルタージュを文学に近づける、彼が最も得意としたクロニカを通して、１世紀前のド・リオの眼が写し出すブラジル社会を考察してみたい。

19世紀末から20世紀にかけてのブラジル

19世紀も残り10余年となった頃、コーヒー農園主たちに支持されたデオドロ・ダ・フォンセッカ (Deodoro da Fonseca) 率いる軍がクーデターを起こし、共和国を宣言、帝政時代は終焉を迎える（1889年）。新政治体制に揺れる情勢の中、オリガーキー(7)が権力を握り始める。それは、大統領にサン・パウロ出身のロドリゲス・アルヴェス(Rodrigues Alves) が、副大統領にミナス・ジェライス出身のアフォンソ・ペーナ (Afonso Pena) が勝利を飾ったこと（1902年）、「カフェ・コン・レイテ」政策 (8) が揺るぎないものであったことからも伺える。

前大統領のカンポス・サーレス (Campos Sales) の資金計画によって、財政は安定していた。おかげで、新たな借入金で様々な公共事業が実施された。新しい港の建設、古い建造物の改修および衛生管理の充実、ボリヴィアから割譲した現アクレ州の併合、多くの鉄道の改善工事などであるが、中でも最も建設的と注目されたのは、リオデジャネイロの都市化である。市長、ペレイラ・パソス (Pereira Passos) の協力を得て、何千人もの死者

を出した腺ペストや黄熱病の原因だった、せまく汚らしい路地や港や街に溢れるゴミを撤去し、パリをモデルにして首都の近代化を図るものであった。

最優先問題である連邦首都の改造と衛生化の実現は、しかし、一般市民の犠牲の上に成り立つものであった。下層階級と一部の中流階級の住民は都市の中心部から郊外や丘陵地へと追いやられ、そこに貧民街が生まれた。都市化と衛生化により、長屋など不衛生とされるものは、全て撤去されたのである。そのような犠牲の上に、この時代の近代化は推し進められていった。オリガーキー階層は近代化の熱に浮かされ、ヨーロッパを模倣することに躍起になっていく。この時期、人々がよく口にしたフレーズが、「リオは文明化しているのだ」であった。ここで言う文明化とは、ヨーロッパの言葉、芸術運動、行動様式そして習慣を取り入れることを意味していた。

> この頃のブラジルは“華麗なる時期”と呼ばれ、都市部においては、ヨーロッパからもたらされた消費主義が浸透し、エリートたちはパリの最新のファッションを追い求め、眩いばかりの華やかなパーティーを催したりしていた。少数独裁者による豪華絢爛たる晩餐の宴席で、フランス語に訳されたブラジル人作家の作品が朗読されたりもした。(9)

このように当事のリオは、英語やフランス語を多用したり、午後５時のお茶会 (*five o'clock tea*) を開いたりすることで、まだまだ未成熟なブラジル社会を、ヨーロッパのレベルまで引き上げようと試みる裕福な人々と、底辺の腐臭漂う路地裏に追いやられた人々とが共存する時代なのである。

テクノロジーに対して感じる魅力、急速に拡大する都市、それに歩を合わせようと、パリのベル・エポック(10) を真似るエリートたちの姿は、*fin-de-siècle* (11) に沸く雰囲気の中、追いかけているものが何であるかさえはっきりしないのに、その後を追わずにいられない、まさに *flâneur*（12）状態そのものだった。

1900年から1922年までを、文学史では、ブラジルの現実と向き合うための過渡期として前近代主義 (Pré-modernismo) とよぶ。様々な流派が混

在した時期で、韻文では高踏主義や象徴主義の傾向が見られ、散文ではレアリズムと自然主義の傾向が見られる。この時代を代表する作家として、カイピーラ（田舎者）の日常に焦点を合わせたモンテイロ・ロバット (Monteiro Lobato) と、バイーアの奥地で繰り広げられた貧しい農民たちと政府軍の戦いを描いた社会小説 『奥地』(*Os sertões*) の作者エウクリーデス・ダ・クニャ (Euclides da Cunha) をあげることができる。前者はブラジルの再生と発展を訴え、後者は社会問題－特に北東部の乾いた荒地セルタォン (sertão) に住む人々の苦闘－を浮き彫りにした。この様な出来事の中、しかし、都市部－首都のリオデジャネイローでは、まさにベル・エポック(10)の到来を迎えていた。興味深いことに、ブラジル文学院 (Academia Brasileira de Letras)（1896年）の創立者であり、レアリズムの最高峰でもある、マシャード・デ・アシスがまだ健在であるこの時代に、ジョアン・ド・リオは、ジャーナリストとして、またクロニスタとして、その類い稀なる才能を発揮し、活動を開始していたのである。「伝統的な正装スタイル」のマシャードに対し、詐欺師や高級娼婦の登場する「カジュアル・スタイル」のド・リオは、相反する二つの世界でしかなかった。二人は1904年に、一度会っているが、その際ある記者の「ジャーナリズムは、特にブラジルでは、文学にとって良い要因なのか、悪いものなのか」という質問に、マシャードは、その内容の重大さは認めたものの、返答するには至らなかった。ド・リオはコメントを避けたが、以来、彼はマシャードに二度と近づくことはなかったという。

ド・リオがその頭角を現し始めるのは、『ガゼッタ・ニュース』(*Gazeta de Notícias*) という新聞への、リオに点在する様々な宗教について書いた連載記事からである。この連載は編纂され、1904年に『リオにおける宗教』と題して出版されるのだが、この頃すでにド・リオの才能は皆の認めるところとなっている。序論では、彼の姿勢が明確に記されている。

> 宗教とは？　恐怖と希望が混在する神秘的な感情、私達の手元にはなく、しかし欲しがろうとする力の陰惨なあるいは明るい象徴化、抑圧的な未知なるもの、曖昧なるもの、畏怖するもの、邪悪なるもの。

リオ、この非礼に満ちた時代において、町の一つ一つの街角に寺院があり、一人一人の中には異なった信仰が存在する。

アフリカの奴隷たちの信仰をもつ者、聖書の解釈に心を砕く者、やがて再来するであろうイエス・キリストを待つ者など、実に様々な宗教が散在している近代的な首都は、ブラジルではカトリック一色に染まった国だと思っていたド・リオの目に新鮮な驚きを与えたであろう。

「魔法の世界にて」(No mundo dos feitiços)、「魂の宿」(A casa das almas)、「メソジスト教会」(A igreja metodista)、「黒ミサ」(A missa negra)、「エクソシズム」(Os exorcismos)、「サタニズム」(O Satanismo)、「海への崇拝」(O culto ao mar) など、ド・リオは実に多くの宗教について調べているのだが、ここで注目すべきは、彼の巧妙な語りのスタイルである。例えば、アフリカの宗教について述べる「魔法の世界にて」は、アントニオという黒人の少年にいろいろ聞きながら、一緒に行動し、まるでインタビューをしているかのような形で会話を進め、その間にコメントを付していくのである。

「カーニバルには、黒人はエボー (ebó) するのさ」
「エボーって何だい？」
「エボーは送り出すことなのさ。聖霊たちは皆高原の方に行って、休むのさ」
「もしかしたら、ペトロポリスにいるのかな」
「違うよ。聖霊たちは街を出て森の中や草の間に入っていっちゃうのさ」

ペトロポリスはリオ近郊の山間の避暑だが、そこを遊行する聖霊たちを想像するだけで、思わず笑いを誘われる。クロニカの一特徴であるユーモアをちりばめることを忘れないところは、いかにもド・リオらしいと言わざるを得ない。

また、福音主義の教会がリオにまだ２つあると聞き、修道僧を訪ねたときの別れ際のやりとりなども面白い。

「一つだけ教えてください、最後に。キリストは？　いつ来るのですか」
「マタイ伝にあのお方ご自身が予言された、再来の予兆はすでに現実のものとなっているのです。近いうちにいらっしゃるとは確信しています」
「いつなのですか」
「この世代には必ず。もしかすると、明日かも知れません」

「落ち着いた声で答える修道僧は握手をすると、まるで告知をする人が現われ、一筋の陽光が消えるようにいなくなった。」キリスト再来を信じきっているこの僧のような人々が底辺には大勢いることが、ド・リオの目を通して浮き彫りになっていく。

『街頭の魅惑的な魂』は、やはり『ガゼッタ・ニュース』に1904年から1907年まで掲載された、街頭に散在する人々を描いた随筆やエッセイを編纂し、1908年（マシャード死去の年）に出版された。当時明確にクロニカとは位置付けられなかったようであるが、市民権を得ている現代では、そう呼んでも差し支えないだろう。「街頭」(A rua)、「街頭で目に入るもの」(O que se vê nas ruas)、「貧窮の３側面」(Três aspectos da miséria)、「時々、路の終わりに」(Onde às vezes termina a rua)、「街頭のミューズ」(A musa das ruas)と、5部構成になっている。

> 私は街頭を愛している。（略）このような絶対で大袈裟な愛は、あなた方とも分かち合っているのだ。私達は兄弟だ、似たもの同士のように感じる。（略）愛、憎しみ、エゴイズムー全ては変化し、一定ではない。今日、笑いは苦く、アイロニーは痛切である。世紀は、くだらない事も素晴らしいことも飲み込んで、滑るように過ぎていく。その後に在り続けるのは、前世からの遺産である街頭への愛だ。

ド・リオは街頭に「魂がある！」と断言し、自分の目の前に現れる全ての出来事を、鋭く、また温かい目で追いながら、読者を大都市リオの隅々まで誘なっていく。この方法は、まさに、ブラジルの文芸評論家アン

トニオ・カンディド（Antônio Candido）(13) の主張する、クロニスタの姿勢は、高い山の上から書くのではなく、簡素な地上階から書くのだとした定義そのものではないか。

『街頭の魅惑的な魂』では、大都市の隅に息づく刺青師、街頭を彩る壁画、阿片中毒者、旅のミュージシャン、カーニヴァルの人の群れ、高級娼婦たち、女乞食、恋愛沙汰の殺人、女囚など、ベル・エポックを謳歌する社会とは程遠い題材が、叙情と温かさと風刺のきいた表現で語られていく。中でも、「囚人たちの４つの主なる考え」(As quatro idéias capitais dos presos) というクロニカでは、刑務所の囚人たちへのインタビュー形式で、彼らが何を考えているかを探っていくのだ。そこでは、１）共和国以前の帝政時代への懐旧（いつの時代にもある「昔は良かった」主義）、２）神への信仰、３）マスコミへの興味、そして４）逃亡し、自由を手に入れることがあげられている。ド・リオは、この４つの特徴を、刑務所の外の世界に重ねてみる。それらの間に横たわるのは、罪を犯したかどうかの違いだけで、それを除けば、刑務官と囚人達の世界は、普通の人々が暮らす抑圧する者とされる者の世界と何ら変わるところがないということを、読者に納得させるのである。

第5部の「街頭のミューズ」では、ブラジル文学史を辿る形で、著名な詩人や音楽家のインスピレーションの源となるミューズなるものを「怠け者で、自由で、貧しく、謙虚だ」と見事に定義し、しかし、だからこそ、人々は魅了され、笑いまたは涙を流しながら、「魅惑的な街頭の魂」のミューズであり続けると結んでいる。

この作品も『リオにおける宗教』も、文学的価値はもちろんのこと、ドキュメンタリーとしても高い評価を得ている。

１世紀前の書物が今なお読者に感動を与える所以は、やはりその根底に、当時のリオの様々な側面を通して、力強く語りかけてくる人間の根本的な魂の叫びを、しっかりと見据えて描写したド・リオの才能によるものではないだろうか。それは、ブラジル国民の根底に存在するアイデンティティーの理解につながっていくと思われる。

ド・リオはその後、『文学的瞬間』(*O momento literário*)（1905年）、短篇集『夜の帳の中で』(*Dentro da noite*)（1910年）、戯曲『美しきヴァルガス夫人』(*A bela madame Vargas*)（1912年）などを出版した。前

述のように、死後再評価されるきっかけとなったのが、1956年のブリット・ブロッカの批評である。以後、ド・リオの作品は何冊か再出版されたが、最新のもので注目すべきは、彼が最も活躍した時の週刊誌“Revista da Semana”に連載していたクロニカを中心に据え編纂した『儚いクロニカたち』である。

この本が出版されるに至ったのは、ド・リオの研究者であるニーオベ・アブレウ・ペイショット (Níobe Pereira Peixoto) のたゆみない努力によるところが大きい。彼は趣味で集めていた切り抜きから調べ始め、とうとうド・リオの全作品をそろえるという偉業を成し遂げたのである。こうして、ド・リオの作品が多くの人の目に触れ、その活躍が100年を経た現代において広く知られることとなった。本の構成は、ペイショットの紹介を兼ねた序論、ジョアン・ド・リオのペンネームで描かれた３編のクロニカ、ジョーとして書いた47編、ジョゼ・アントニオ・ジョゼとして書いた３編、そして付記として新聞に載ったド・リオへの追悼文が３編、最後に「ブラジル発見400年祭を祝う今日、500年祭はどう祝われるのだろうか」と、ウルバノ・ドゥアルテ (Urbano Duarte) の記事「2000年」が載っているが、20世紀初頭のリオが抱える問題は21世紀も同じであろうと暗示するところは非常に面白い。まさに中身の濃い一冊になっている。

ベル・エポックの時代には、近代化する都市の後を追うように、夥しい数の雑誌が次々に創刊されたが、この“Revista da Semana”もその一つである。1900年5月20日に、ブラジル発見400年祭を祝う形で、創刊号が発売される。その後幾度かオーナーが変わるが、ターゲットは常に、婦人や若い娘、また午後5時のお茶会 (*five o'clock tea*) の参加者や市立劇場の観客たちであった。1916年から1921年までの表紙は、ハイレベルのアール・ヌーヴォー調のイラストで飾られた。

ド・リオはこの雑誌の「エレガントな週」(A semana elegante) というコラムにクロニカを掲載していた。『儚いクロニカたち』には、1916年2月5日から翌年１月13日までに掲載していたものが編纂されている。言葉の遊びや英語、フランス語を取り混ぜた会話、またファッションについても書かれているが、単なる軽い読み物で終わるのではなく、多くの場合、庭での茶会や、フランス語を使いたがるリオ市民たち、ブラジル演劇の衰退などについて、辛口なアイロニーをもって批判している。この一連のクロ

ニカを通し、表面的に「文明化」した当事のリオの住人達が「成熟した文明社会」という幻想にいかに酔い痴れていたのかが理解できる。

『儚いクロニカたち』で、ド・リオは四季の移り変りにそって、自分を取り巻く日常の小さな出来事を描写していく。全月ではないが、「4月」(Abril)、「5月」(Maio)、「6月」(Junho) など、各月の一週目には、その月を予言するかのように書いているところが面白い。例えば、「9月」(Setembro) では、こう書いている。

> そう！もう9月なのだ。我が魅力的な友であるあなたがどうお考えかは知らない。
>
> 私は年末までに4ヵ月しかないということ、そしてその後には、クリスマス、新年、カーニバルがまたいつものようにやってくる。あまりにも同じことなので、こう言いたくなるのだ。
>
> 「またか！」
>
> 人生は何と平凡で、全てはこうも繰り返されるのか。30歳を過ぎれば、もう新しい事は何もない。相変わらず何も知らないまま、全てを知ったことで疲れているのだ。

現代人もまったく同じ感情の中に生きているではないか。またド・リオは、その中で、「パリの5月の”パスティーシュ”」と皮肉を言っている。季節が逆になるので、パリの春は5月である。つまり、ブラジルの9月は、パリでは秋に相当するが、それを自分の人生の晩秋にみたて、そのままブラジルの未来を予測するのである。

１月１日付の「伝統」(Tradições)では、40歳の男性と20歳の男性が大晦日の過ごし方について語っている。

> （略）両者とも良家の方々で、完璧な着こなし。
>
> 40歳「何とも早い。今日はお昼の前におでかけかな？」
>
> 20歳「*All right. Des affaires, mon cher; business...*」

40歳の男性は、フランス語や英語を連発し、大勢の貴婦人たちへチョコレートや花を贈り、シャンパンでキリスト生誕を祝おうとする若者を諭

そうと試みる。「それはパリの猿真似ではないか」と。しかし、若者は「確かにおっしゃる通り。でも流行なんだよ。昔の伝統的な家族との遅い夕食なんてもうまっぴらだ」と答える。結局、40歳の男性は、「伝統は若い人のためにある。また我々の習慣からも消えていくのだ。しかし、無為に残すだけなら、なくしてしまったほうがいいのさ」と言い捨て、最後は若者と一緒に華やかな大晦日に繰り出していく。

話題の的となった、市立劇場で演じられた寸劇「ある午後５時の茶会」(*Um chá das cinco*) は、「ウィットにとんだアイロニーを散りばめたエレガントな風刺劇である」との当時のコメントにある通り、パリのサロンの風景をそのまま再現し、うわべだけの「文明化」に陶酔するブラジル社会を痛烈に批判している。登場人物は、茶会を開く女主人、恋人たち、よくしゃべるご婦人たち、政治家、ジャーナリスト、文学青年たちで、世の中や恋愛について意見をかわす模様を映し出している。ポルトガル語、フランス語、英語、イタリア語、そしてスペイン語が飛びかう会話は、それだけでも一笑に値する。「文学は今や良き社会の趣味にすぎない」というフレーズには、当時のはびこった文学への姿勢を伺い知ることができる。

この寸劇を観た人々からの、特定した人物への中傷ではないかとの投書に対し、8月6日の「人々」(Pessoal) というクロニカを通して、ド・リオは見事に答えている。

> 「ある午後5時のお茶会」－単なるお遊び－については、言われるであろう。
>
> 「まったく、あの人そっくりではないか！」
>
> しかし、誰もＡさんだ、Ｂさんだとはっきり断言はできまい。
>
> なぜなら、ＡさんでもＢさんでもないからだ。それは私が考えて創り出した人物だからだ。
>
> 芸術において、中傷を目的として書かれたのであれば、芸術は匿名で人を侮辱するジャーナリズムになってしまう。それは下劣な行為にほかならない。（略）
>
> また一文学者が、誰かの注文に従って、実在するＸやＹを中傷するために戯曲などを書くということは、信じられないことである。

「模倣」(Imitação) では、憚ることなくブラジル社会に対する批判を明確にしている。

> 「ブラジルは、流行を追う国としては、強烈だ」
> 「なぜ？」
> 「模倣の国だからさ」
> 「そんな大げさな」
> 「こんな国は他にないね。都市でのファッションのアレンジをみてごらん。（略）この国にはオリジナリティーというものがないのさ。もしあったとすれば、直ちに模倣の逆鱗に触れ、消し去られてしまうのさ」

現代におきかえて考えると、ブラジルのオリジナリティーとは多文化社会を指すのであろうが、当時はヨーロッパ社会をそのままコピーしていた。ド・リオはムラト（白人と黒人の混血）だったが、まだまだ白人優位説が根強かった当時の社会は、彼にとって生きにくい場でしかなかったに違いない。

当時、彼は活躍の場をクロニカに限定せず、文芸というもっと大きな枠で考えてはいた。しかし、クロニカが、ブラジル的なものを渇望する文壇の条件にこたえる形で誕生したものであるとすれば、ヨーロッパ人ではないド・リオが、クロニカに自分自身の居場所を見出したのも納得できる。

おわりに

ド・リオは、自分のフィルターを通して、目まぐるしく、そして見苦しく変化する首都を、そこに散在する生きとし生けるものを描いていった。題材は、読者の隣人であり、誰もが理解できる時の話題である。彼は、当時のブラジルがヨーロッパの模倣にすぎず、ブラジルたるものの本質を見失っていることを認識し危惧していた。それゆえ警鐘をならす意味で、皮肉を散りばめた作品を書き続けたのである。また、クロニカに対する姿勢は非常に明確で、文芸として二流であるとしても、人を楽しませるという

点では、偉大な文学作品に引けをとらないと断言するかのように、作品を発表しつづけた。

ルーベン・ブラガ (Rubem Braga) (14) のブラジル文壇における最も大きい貢献が、クロニカを革新したことにあると言うならば、ド・リオはクロニカを文学の一ジャンルとして確立することに貢献したといえるのではないか。ジロン (Giron) (15) の言葉を借りれば、彼は、「クロニカを素晴らしいルポルタージュに、ジャーナリズムをフィクションに変身させた」のである。クロニカについての数ある定義の中で、大きな説得力をもつと思われたのは、ラウール・アンテロ (Raul Antelo) (16) による「学識の規則を告発し、学識の規則に従って表現される底辺の文化」との定義であった。まさに、ド・リオの姿勢そのものではないだろうか。

ド・リオは、その素晴らしい観察力を原動力とし、際立った批判や奇抜な批判、そして時には叙情的な表現を駆使しながら、20世紀初頭のリオデジャネイロのフラッシュを映し出してくれるのである。彼は、前述の「人々」に次のように書いている。

> 芸術はとても厳粛なものであり、それに携わる者は、（略）不死へのパスポートを手に入れるようなものなのだ。

『ボヴァリー夫人』やギリシャ、ローマの文人たちを取り上げ、彼らが今を生きる我々の手に届くのは、作家たちの愛着か憎悪のおかげだと断言する。そこまで彼は努力するつもりはないのだが、彼の作家活動の基本姿勢が語られる箇所は、まさにクロニカの基本理念に相当するものではないだろうか。

> だからこそ、私の戯曲も、クロニカも、未来の著書も、読者が理解できるものに終始する。そして、今私が生きているこの瞬間の側面を、記憶に止めようとする想いだけがその中にあるのだ。

モイゼースは「クロニカは時の腐食に勝てない」と断言しているが、ド・リオの作品は１世紀たった現在でも、人々に共感を与えている。感動を呼び起こす。それはまさにintemporalidade (時を超越する) の証明とい

えるのではないだろうか。クロニカは「儚さ」の上にしかなりたたない。しかし、その厳しく危うい条件の下でも、時の腐食に十分耐え得る力をもっている。つまり、文学作品の最も重要な条件とされる普遍性を有しているのだ。この普遍性にこそ読者は魅力を感じるのではないだろうか。

> クロニカとは、その本質において、強い抒情をもつ一つの芸術、言葉の芸術である。非常に私的で、人生のスペクタル、出来事、生きとし生けるものを前にして起こる個人的な、そして本質的なリアクションなのである。

文学の題材となる人間、とりわけその中でも人間の日常に起こる小さな出来事と喜怒哀楽に、クロニスタ独自のスパイスをきかせてクロニカは産み出される。

20世紀初頭に人々が感じていたことは、100年を経た今でも変わっていない。相変わらず、「ブラジルは、流行を追う国で」、「新年やカーニバル」は「またいつものようにやってくる」のだ。彼らが都市化に浮かれているシーンは、めまぐるしく変化する現代社会を前に人々がとまどう様に通じるものがあるのではないか。だからこそ、我々はド・リオの作品に共感をおぼえ、それが彼の再評価につながっていったのではないかと思っている。

＊　ポルトガル語文献およびクロニカの引用は、本稿のために独自に翻訳したものである。

注

(1) トイダ、エレナ「クロニカ(1)-ブラジル文学における独自のジャンル」、『上智大学外国語学部紀要』第36号、2001年、pp.133-147
(2) ド・リオ　当時の首都、リオデジャネイロを「リオ」と略すので、ジョアン・ド・リオはあえて「ド・リオ」とする。
(3) クロニスタ　クロニカを書く人のことを指す。

(4) モイゼース　Massaud Moisés, *História da literatura brasileira*, vol.V 500ページ参照。

(5) Moriconi, Italo, *Os cem melhores contos brasileiros do século*, 28ページ参照。
カーニバルではよく仮面をつけるが、それは顔を隠すための都合のいい装飾にもなってしまう。一見とてもかわいい娘の、その下に隠された不気味な鼻の話。

(6) ド・リオは、ブラジルで初めてオスカー・ワイルドの『サロメ』や『ドリアン・グレイの肖像』を翻訳、紹介した。

(7) オリガーキー　oligarquia　少数独裁政治

(8) *café-com-leite*　カフェ・オーレの意味で、コーヒー栽培が盛んなサン・パウロと牧畜・酪農が盛んなミナス・ジェライス州の出身者たちに、ブラジルの政治が委ねられていた時代。

(9)『ブラジル文学事典』159ページ参照。

(10) *belle époque* 美しき優雅な時代、1871年から1914年までの、パリの社交界の生活に特徴づけられる。

(11) *fin-de-siècle* 世紀末の文芸において退廃的な気風の著しかった19世紀末を指す。

(12) *flâneur* ドリオが flanar と新しい言葉を造り、浮かれ気分を批判した。

(13)「読書が好きになるために」（Para gostar de ler）シリーズのクロニカ特集号に書いた序文で、このジャンルについて論じている。

(14) クロニカの最高峰。唯一クロニスタとしての業績のみで、ブラジル文学史にその名を連ねる作家。（1913年～　）

(15) 参考文献 Giron, Luís Antônio, “João do Rio, o cronista da virada”

(16) 参考文献 Setor de Filologia da FCRB, *A crônica*

(17) 現代の評論家達に大きな影響を与えたことで知られるブラジルの文芸評論家。

参考文献

Barreto, Paulo, *Crônicas Efêmeras,* São Paulo, Oficina do livro, 2001

Bosi, Alfredo (org.), *A história concisa da literatura brasileira,* São Paulo, Cultrix, 1977.

Cândido, Antônio, *Literatura e sociedade,* 6.ed., São Paulo, Ed.Nacional,1980.

Coutinho, Afrânio, *Introdução à literatura no Brasil,* Rio de Janeiro, Bertrand Brasil, 1995.

Coutinho, Afrânio, *Notas de teoria literária,* Rio de Janeiro, Civilização Brasileira, 1976.

Moisés, Massaud, *Dicionário de termos literários,* 3.ed., São Paulo, Cultrix,1982.

Moisés, Massaud, *História da literatura brasileira,* vol.V, São Paulo, Cultrix, 1983-1989.

Moisés, Massaud, *Pequeno dicionário da literatura brasileira,* 6.ed., São Paulo, Cultrix, 2001.

Moriconi, Italo(org.), *Os cem melhores contos brasileiros do século,* Rio de Janeiro, Ed.Objetiva, 2000.

Sá, Jorge de, *A crônica,* São Paulo, Ática, 2001.

Setor de Filologia da FCRB, *A crônica,* Campinas:Ed.Unicamp, Rio de Janeiro: Fundação Casa de Rui Barbosa, 1992.

Silva, Francisco de Assis, *História do Brasil,* São Paulo, Moderna, 1992.

Stern, Irwin, *Dictionary of Brazilian literature,* Westport, Connecticut, Greenwood Press, 1988.

http://www.biblio.com.br, João do Rio, *A alma encantadora das ruas*

http://www.biblio.com.br, João do Rio, *As religiões no Rio,* Ed. Nova Aguilar, 1976

http://www.geocities.com, Giron, Luís Antônio, “João do Rio, o cronista da virada”

田所清克・伊藤奈希砂『ブラジル文学事典』、彩流社、2000**年。**